

# わかばの保育について

医学博士 服 部 清

八千代わかば幼稚園  
若葉ナースリ・スクール  
若葉高津保育園

## はじめに

このパンフレットは、幼稚園や保育園にお子様を入園させるにあたって、園の基本方針について保護者の方々にご理解を頂くことを目的として著したものです。著者の服部清は、学校法人服部学園および社会福祉法人北蓮児童育成会の初代理事長であり、八千代わかば幼稚園、若葉ナースリ・スクール、若葉高津保育園を創設し、園長として園児の保育に責任をもってあたってまいりました。

本文にありますように、初代理事長・園長服部清は早稲田大学において心理学を専攻し、臨床心理学を専門として少年鑑別所・児童相談所などで少年や児童の心身の鑑別にあたり、その後は早稲田大学の教授として学生の指導と研究に取り組んでまいりました。この間に、初代東京少年鑑別所長成田勝郎・次代所長齋崎轍の二人の精神医学者から精神医学を学び、その原理である精神軌道学・心情理論の心情科学を体得して、幼児の保育や青少年の教育に心情科学の原理を基礎とすることが不可欠であることを痛感するに至りました。

その細かい経緯や具体的な保育方針については本文に委ねますが、現役の早稲田大学教授のまま亡くなるまで数十年間の長い学究生活の間、終始一貫して変わることなくこの原理理論に基づいて大学で講義を行って若い学生を指導し、また乳幼児の保育実践を通じて若いお母様方の啓蒙に努めてまいりました。

まだまだやり残した仕事が多山あったことと思われませんが、残念ながら病に侵され、六十八才を一期として平成5年1月20日に鬼籍に入ってしまった。その後も、理事長服部芳子、園長藤澤彩が、その意志を引き継いで変わらぬ方針で保育にあたってまいりました。

平成18年に国では保育の一体化を目指した認定こども園法が制定され、平成20年4月に若葉ナースリ・スクールと若葉高津保育園は幼保連携型認定こども園の認定を受けました。設立の経緯から、本園では当初から幼保一体化を進めてまいりましたが、幼稚園と保育園は所轄官庁も異なり一体的に運営していくことは多くの困難がありました。認定こども園制度の成立は、様々な苦勞を乗り越えて、制度に先駆けて実践してきた取り組みが、やっと公に認められたとの感がありました。

今後も、初代理事長・園長の意志を継ぎ基本方針を護りながら、時代に相応しい方法で、幼児教育・保育・子育て支援を三つの柱として、全ての子どもと家庭の幸福のために取り組んでまいりたいと思います。

平成25年10月

学校法人 服部学園  
社会福祉法人 北蓮児童育成会  
理事長 服部 芳子

## ● わかばの保育－（園設立の目的）

わかば幼稚園・若葉高津保育園・若葉ナースリ・スクールに共通した保育の理念をわかばの保育とよぶことにします。

わかばの保育の特色は心理学・精神医学などの自然科学を基礎にした保育ということです。幼稚園・保育園の保育は、保護者の方に園の方針を理解していただいて、園と家庭の双方で協力すると非常に効果かあると思います。科学的方法を基礎にしたとたっただけでは解りにくいし、また大切なお子様を何年間か保育するのですから、園がどのようにして出来たのかをお話しておくことも園の責任者として必要なことと思って、このパンフレットを書いてみました。

私は、戦後の昭和 23 年に早稲田大学の心理学専攻科を卒業しました。その頃、臨床心理学を研究していたのはこの大学だけでした。卒業後は法務府技官として、東京少年鑑別所でいわゆる非行少年の性格や知能を診断していました。その後、27 年から 33 年迄の間、福井大学で心理学を教える他に、福井県の児童相談所の嘱託を兼務し、鑑別所の少年よりも幼い子供達の心理診断に当たりました。

この十年間の経験から強く感じたのは、幼い時にどのように扱われ、育てられたかという生育史がその後の人格形成に非常に大きく影響するということでした。

どんな親や教師でも、子供を悪い子にしようなどと考える人はありません。それにもかかわらず鑑別所や相談所にくる子供は、親や教師の意図と異なった性格になっているのです。また、子供自身でもはじめから悪い子になろうと思ったり、学校を怠けようと思っていたわけではありません。叱られたり、罰せられたりするの好きな子供もいないのですが、親や教師の考えに反してだけでなく、自分自身の希望にも反して悪い子供になってしまうのです。

こうした子供の不良化、非行化現象が我々の精神に関する自然科学的な知識の欠如によるものであるということ、つまり精神的に非衛生的な環境や扱い方で育てられた結果であることを教えてくれたのは、成田勝郎先生と鱒崎轍先生でした。二人の先生は共に東京大学医学部で精神医学を学んだあと、不良少年と呼ばれる子供達の教育治療に一生を捧げた人です。成田先生は私の義父にもなりますが、死ぬときは東京少年鑑別所の初代所長でした。また、福井大学にいる間には、脳生理学の研究法を大阪大学の吉井教授から教えていただいたので、心が原因で起こる心身の生理的変化を知ることができるようになりました。

このようにして得た心理学や精神医学の知識を基礎にして、家庭や幼稚園で育児や保育を行ったならば、きっとすばらしい子供が育つだろう、そしてそうなれば相談所や鑑

別所にくるような不幸な子供達も少なくなるのではないだろうかと考え、幼稚園を作りたいと思うようになりました。家内も心理学を学んだ後に東京家庭裁判所の調査官として非行少年の調査等をしておりましたが、私の考えに賛成して勤めをやめて協力するという事だったので、八千代台に小さな幼稚園を作る事になりました。昭和 32 年の 6 月の事でした。

この幼稚園を、わかばナースリ・スクールと名づけました。米国では幼稚園（キンダーガーデン）というのは就学前の一年間だけ行くところをいい、それ以下の年齢の子供の行くところはナースリ・スクールといいます。また英国ではキンダーガーデンというよりナースリ・スクールという方が一般的です。私がこの名前を気に入ったのは、設立した目的からいって、できるだけ小さいうちから入園してもらいたかったからです。近所の 2 才から 5 才迄の子供達が 2～30 人集まりました。お母さん達も人数が少なかったせいもあってか、よく私の方針を理解して協力してくれました。

成田・鯨崎両先生の教えて下さったのは原理だけで、保育そのものではありませんし、33 年より戻ってきた母校であり勤務先でもある早大には、幼稚園も小学校も付属してないので、この小さな幼稚園でいろいろ研究をしながら実際にやってみる必要がありました。

この時から現在まで既に三十年からの歳月が経ち、はじめの頃は卒業した人達は社会人としても中堅層で活躍し、多くの卒園生の中には早大で再び私の講義を聞いた人もいますし、現在わかば幼稚園やナースリ・スクールの先生として一緒に仕事をしている人も数人おられます。又卒園した人達の子供が、入園して再び卒園生として巣立っていったり、或は現在在園中の子供達なども幾人もおられます。たいへん嬉しいことと思っております。

卒園した人達が小学校・中学校・高校等でどうなるのか、初めは随分心配でした。しかしこの人達は予想以上によい成績でしたので、私は自分の保育方法の正しいことに自信をもちました。

この八千代台のナースリ・スクールは規模を大きくしなかったのも、次第に人数が増え、一・二年保育以外の子供が入園できなくなってしまいました。残念なことでしたが昭和 42 年からナースリ・スクールから幼稚園組織に替えざるをえなくなってしまいました。名称も八千代わかば幼稚園に変更しました。

八千代台で、わかばナースリ・スクールを始めたときは、まだ八千代市ではなく、八千代町でしたが、保育園も幼稚園も一つもありませんでした。36 年に初めて町立の保育所を作る事になり、町では初めての事なので、面倒をみて欲しいと町長から頼まれました。どうも正式の所長をおくには、町には財政的余裕がなかったこともその理由

の一つのようでした。この保育所の保育方法や内容を決めるにはナースリ・スクールでの経験が役に立ち、又農村地帯の子供も多かったので、子供達もいろいろ新しいことを教えてくれました。

大和田保育所・米本保育所・睦保育所は、設立した当初から私が指導しました。この保育所の仕事は、私が大学の在外研究員として渡米することになった44年まで続けました。その後八千代市になってから沢山の保育所ができましたが、当時私と一緒に仕事をしてくれた保母さん達が所長になって活躍しました。

私が米国での在外研究を終えて帰国してから、47年に高津団地を開発する時に、市から今度は私に私立の保育所を団地内に作って欲しいという依頼がありました。私は幼稚園はともかく、保育所は公立がよいという意見でしたので断りました。それは以前の経験から、理想的にやろうとすると保育所は非常に費用がかかるのを知っていたからです。しかし、団地の入居時期が切迫していること、市の財政に余裕がないことなどを市長から説明され、是非にということでしたので、保育所時代からの市との関係や、また幼稚園よりも年齢の幼い子供達を扱えることなどを考えて、できるだけ早い機会に近くに市立の保育所を作って、ここを大規模の園にすることを要求しないことを条件に社会福祉法人若葉高津保育園を作ることにしました。

保育園は、現行制度では母親が仕事や病気等で面倒が見られない子供達が優先的に入園することになっています。しかしこの若葉高津保育園には設立当初から、こうした家庭の子供達のほかに、一般の家庭の幼児で入園を希望するものがあり、次第にその数が増えて、52年までには60名を超えるようになりました。運動場や教室は十分余裕がありました。この子供達は保育所のように長時間保育を必要としないので、保育の仕方を少し変える必要がありました。そこで保育園と分離することにし、53年度から別に学校法人を設立してナースリ・スクールという名称を復活させ、三才児から入園できる幼稚園にしました。これが現在の若葉ナースリ・スクールです。55年度には図書室・三才児の教室も出来上がりました。

以上が八千代台にわかば幼稚園を開設し、高津団地に若葉高津保育園および若葉ナースリ・スクールが出来た迄の概略ですが、何れにしても心理学や精神医学の原理に添った科学的方法にもとづいて保育を行うという方針に変わりがないことはいうまでもないことです。

## ● 科学的な保育 - (わかばの保育方針)

### ※ 保育における科学の必性

育児や保育では身体と精神の二面が考えられることはいうまでもありません。身体についての知識は医学の進歩、普及によって誰でもある程度知識として知っています。

パスツールによって開拓された細菌学によって生まれた疫学・免疫学・ウイルス学は、感染についてそれがどういうものかを明らかにしただけでなく、血清・ワクチン・スルファ剤・抗生物質など、子供達の敵をたおす有効な方法を私達に教えました。また合理的な食事を与える方法についての科学である栄養学なども、育児を進歩させました。こうした知識に基づいて、身体については充分注意を払って子供を育てています。

それでは精神についてはどうでしょうか。心理学や精神医学が誕生してまだ百年から二百年しか経っていないこともあって、人格形成の基礎科学である心理学が、また精神疾患の治療や予防に必要な精神医学が、保育や育児に重要であることすら充分気づかれているとはいえません。

有名なスブック博士の「育児書」なども大部分が身体に関することで、心のことについては僅かな頁があてられているに過ぎません。他の育児書でも同じです。心のことについて書いてあると思うと、単なる著者の個人的意見や解釈で、とても科学などといえない内容のものが多いのです。

現在、社会問題として取り上げられている、登校拒否・家出・非行・自殺・暴力などについても同じことです。何れも子供の心に起こっていることには間違いはないのですが、大勢の知識人といわれている人達がそれぞれただ自分の意見を述べ合っ、責任を社会や学校や家庭に求めるだけで、何故そうなるかを科学に求めるというようにはなかなかならないのです。

学校は教育を行うところであり、教育は精神に関した事柄ですが、この教育の行われる学校においても事情は同じです。私は大学生にもう30年以上児童心理学・臨床心理学・人格心理学などを講義してきましたし、また学生相談センターの所長も兼務してきましたので、随分多くの大学生達と出会いました。礼儀正しく、成績も良い学生が自分の性格のことで悩んでいて、極端な場合はノイローゼになり、そのために折角入学した大学を退学したり留年するという結果になる学生も沢山見してきました。こうしたことは心理学や精神衛生ということが、教育場面でも考えられていないことによるものです。

幼い子供の例をあげてみましょう。ひどく落ち着きのない子供がいたとします。見方によっては元気のよい子供ですが、心理学的にいえば《意志活動の制止力の弱い不安定性》の子供ということになります。教室では他の子のように授業中じっとしていられな

いし、家でもいたずらが激しい、勉強が長続きせずすぐに飽きてしまうということになります。それに対して、親や教師は絶えず注意したり叱ったりすることになります。子供自身の気持ちでは「じっとしていようと思うのだけれど、体がひとりで動き出してしまう」ので、わざとそうしているわけではなく、落ち着いてじっとしていいたいのですができないのです。それを先生や親から絶えず叱られたり注意されたりしていれば、気の強い子供なら反抗的な態度にでるかも知れません。そうすればまた、それを叱られることになります。もし気の弱い子供であれば、あきらめて自棄的になり、何も努力しなくなるでしょう。これでまた叱られるということになり、何れにしても悪循環なのです。この子の場合《不安定性一意志活動の制止力の弱さ》を治せば解決してしまうことなのですが、叱ったり・注意をしたり・罰したり・激励したりすることはその弱さを治す方法ではないのです。子供はわざとしているのではないのですから、絶えず叱られたり注意されたりしているうちに、段々ひねくれてきて本当に悪い子になってしまいます。

叱ったり・注意したり・罰したりという方法で直そうというのは、その子の考え方や相性が悪いという、親や教師の解釈によるのですが、これは体の悪い病人を叱って直そうというのと同じことです。体のことに例えれば、胃腸の弱い子供に栄養があるからといって、消化のわるい食物を無理矢理に叱りつけてでも食べさせようとしたり、具合が悪く下痢をしている子に、汚いからといって子供の心がけが悪いせいだと決めつけて罰して治そうと考える人はいないでしょう。しかし心に関することとなると、これと同様な非科学的なことが当たり前のように行われているのです。

こうした精神に対する考え方の混乱の一つには、日本語の精神という言葉に二つの意味があることによります。英語ではマインドとスピリット、ドイツ語ではゼーレとガイスト、というように同じ精神を意味する言葉が分かれています。マインドやゼーレというのは、成長したり病気になったり、治癒したりする心理的や精神医学の対象である精神であって、自然法則にしたがって動いている我々の心です。スピリットやガイストや日本精神といった精神は自然法則に支配されていない心であって、倫理学や道徳や宗教・文学などの対象になっている心です。

この二つの精神を区別しますと、保育や教育の意味がはっきりしてきます。「教育」は勿論この二つに対して行われるのですが、「教」はスピリットやガイストについて、「育」はマインドやゼーレについて言われることになります。

鱒崎先生はマインド・ゼーレに当たるものを「心情」、スピリット・ガイストに当たるものを「人間性」という言葉で区別しました。この二つの精神が混同されると、子供に対する扱い方、また自分自身の心の動きについての考え方に、やはり混乱が起こってしまいます。

保育においても、「心情」と「人間性」の二つを考えることは必要ですが、どちらかといえば「心情」を健康に育てる方が重要であると考えられます。

## ※情緒の発達

性格や性質という言葉には、一生変わらないという意味がありますので、ここでは性格の基礎となっている心の動きを「情緒」とよぶことにします。鱈崎先生の言葉を使うと「心情質」ということになります。

この情緒は、新生児の場合には「興奮」しかありません。空腹になれば興奮して泣き、ミルクを与えられればこの興奮は静まってしまいます。幼児は2～3才位になるまでは蛇や虫を見ても恐がりません。それは「恐れ」という情緒が発達していないからです。乳児は母親に色々世話をしてもらいうちに、次第に情緒が分化してゆきます。これは脳の成長も関係していますが、大部分は子供の体験によって発達してきます。この情緒は5～6才頃、つまり小学校に入学する頃までには、ほとんど成人と同じ種類に分化します。生まれたときには興奮だけあったものが、恥ずかしがる・恐れる・心配する・嫉妬する・怒る・羨む・失望する・不満・嫌悪する・可愛がる・望む・喜ぶ・得意になる・快を感ずる、というように大人の情緒と同じ位の数に分化します。

大切なことは、この発達が第一には社会生活が必要な種類の情緒に分化していること、第二にはそれぞれの情緒は刺激や状況に対して適当な強さの反応であることです。臆病だというのは、恐れ的情绪反応が強すぎますし、まただからといって何も恐ろしいことがないというのでは危険すぎるでしょう。

こうした情緒のはたらきは、知的なはたらきとも関係しています。大人でも非常に悲しい時・嬉しい時・心配な時などには、平静なときのように頭がはたらかないことでも分かるでしょう。心配ごとが多い子供が段々勉強ができなくなるのはこの理由によるのです。

情緒が健全に発達するためには、先ず子供の育つ家庭の雰囲気安定していることが必要です。多少両親の意見が異なっても、よく話し合って育児やしつけの方針を一定にしておくことです。一方が自分の意見や方針を感情的に無理矢理に押し通すというのでは、家庭の雰囲気が一定だといえませんが、気楽に安心していられる落ち着いた雰囲気が必要です。

幼稚園や保育園でも同じことがいえます。その園が一定の方針で保育が行われていることが必要です。ある先生は子供を厳しく扱い、ある先生は子供を甘やかす態度をとるというのでは一定の雰囲気にはなりません。園児の間に不必要な競争が行われていたり先生の指示や命令がバラバラであったり、注意が行き届かないために子供が不安になっ



たりすることもよくないことです。また、子供に見せたり聞かせたりする話でも、あまり可哀想で子供が泣き出すようなものとか、興奮し過ぎるようでは、話の内容がよくても刺激が強すぎて子供にとっては適当とはいえません。園児の数が多すぎて先生がイライラしていると、子供もイライラしますし、それで親もイライラしてしまうというのは最悪の状態というほかはありません。

情緒のはたらきが正常でない場合には、これを治すように扱わなくてはなりません、この年齢の子供は、扱い方によってすぐにおかしくなるのですが、またすぐに治ることも事実です。原理的には我々の心情の持っている自然の回復力を利用すればよいのです。身体に自然治癒力があって、具合の悪い時は安静にしているだけで治ってしまうことはよく知っていることですが、心情の場合も同じことなのです。

私達が非常に腹が立ったり、イライラしていても、腹を立てている直接的な刺激から遠ざかるようにしたり、イライラさせる刺激を取り去って、少し休息していれば自然に落ち着いた状態に戻ります。

強度に情緒の具合の悪い場合は、治すためにはもっと別の方法をとる必要がありますが、軽い程度であれば、悪い不安定な刺激を避けて、休息しただけで治るものです。

朝登園してきた子供が不機嫌で、いうことをきかずグズグズいつて教室に入らない時がよくありますが、こうした場合は叱ったり、なだめたり、すかしたりするよりは、クラスから離して一人で職員室や図書室などで気分を落ち着かせる方がよいのです。子供には「皆と一緒にやりたい気持ちになるまでここにいなさい」というだけです。大抵は30分もすると「もう直ったから皆の所に行く」といいます。これは罰を与えたのでも放置したのでもありません。情緒が安定するように、周囲からの刺激を弱くなるようにしたのです。体の具合の悪い時に休ませるのと同じことです。

#### ※ 知的発達について

知的なはたらきの基礎は、先に述べた情緒が健全に発達し、安定した状態であるとき一番よくはたらきます。知的なはたらきには、速度・深度・持続度の三つの面が考えられます。速度というのは、頭のはたらきの速さの度合。深度というのは、物事を深く考える力。持続度は、頑張って知的な作業を続ける力です。この三つがバランスよく発達していることが、将来学校などでよい成績をあげる基礎になるものです。

わかばでは、絵や粘土や折り紙などが上手にできるようになることは必要なことだと思いますが、直接そのことだけを上手にできるように教えこむのではなく、先ずこの三つの頭のはたらきを伸ばすことが肝心なことです。絵や粘土や折り紙といった作業を通して、この三つの力を発達させたいと考えています。

それではどのようにしてこの三つのはたらきを伸ばしたらよいでしょうか。

「**速度**」、つまり頭のはたらきを速くするには、最初はゆっくりと丁寧に正確にやらせて次第に同じ作業を早くさせるようにします。ものを書いたり作ったりするのが早くなると、出来る量が多くなり、多くなると自然にもっと早くやるようになります。とはいっても同じ事ばかりでは飽きてしまいますので、飽きてきたようなら内容を変えてやる必要があります。

「**深度**」、つまり深く考える力をつけるには、少し難しい問題をあたえてよく考える癖をつけるのです。出来なくてもこれは勉強ではないのですから、すぐ答えを教えないでヒントを出して考えさせるようにします。すぐ教えようとしたり、間違ってもからかったり、叱ったりしないことです。親や教師はこの訓練をしているときに、よく子供の思考の仕方に注意しなければなりません。「表通りと裏通りでは、どちらが危ないですか」という質問に対して、子供が「裏通り」と答えるかも知れません。多分表通りには、信号や歩道橋があるから安全だと考えたのでしょう。間違った答をしても、正しい答をしても、理由をよくきいてみる必要があります。なぞなぞ遊び等は、子供が喜ぶので上手に利用すると深度の訓練に役に立ちます。

「**持続度**」、つまりどれだけ長い間、知的な作業を続けていられるかということですが小学生や中学生で自宅で机に向かっても勉強が長続きしないですぐに飽きてしまうというのはこの持続力か弱いのであって、別に《飽きっぽい性格》や《意志が弱い性格》というわけではありません。こうした型の子供は知的作業の短距離選手なのです。始めから全速力を出したらすぐに疲れてしまいます。もしそうでなければ、情緒に弱い所があるために力か弱くなっているのです。体に不健康な所があれば体力が落ちるのと同じようなことから、先ず情緒「心情」の弱い所を治すことになります。

比較的長い時間勉強してられる子供は長距離選手のようなもので、決して始めから全力疾走するようなことはしません。力を抑えながら、疲れないように勉強をしているのです。学校の勉強はこの長距離選手型の方が有利です。

こうした長距離選手型の仕事の仕方を覚えさせるには、あまり頭を使わないで出来る単純な知的作業を自分のペースでやらせて、疲れる（飽きる）前にやめ、疲れが直ったら再びやるというようにします。競争させたり、褒めてやるのではこの訓練になりません。子供は自分一人で絵を書いたり、積み木等をしているときは、決して急いではやらないものですが、傍らからお母さんなどが「上手ね」などと言ったりすると、嬉しくなって一生懸命やり始めてしまいますので、持続力の訓練には褒めるということは禁物なのです。

園でこの訓練をする場合には、「いやになったらやめてよい」という指示をだすか、

見ていて疲れたようなら先生がやめさせてしまいます。あまり面白いものはやり過ぎるのでよくありません。疲労感がないからです。丁度美味しいものだとつい食べ過ぎるようなものです。勿論先生が「随分できたね」などと褒めたり、「頑張ってる」などといったのでは何を訓練させたのか分からなくなります。家庭でこの力をつけるためには、一人で書いたり、読んだり一人遊びをする時間を作ってやることです。いつも友達とばかり一緒に遊んでいたのではこの力はつきにくいのです。

わかばでは、以上の速度・深度・持続度を伸ばすための「メンタルワーク」という教材を作って、利用しています。言葉の通りこれは勉強ではなく、勉強をするための基本的な力をつけるためのものです。

### ※ 社会性について

よく、幼稚園に子供を上げるのは、社会性をつけてやりたいからだというお母さんの言葉をききますが、本当に幼稚園や学校で社会性がつくと思いますか。一般に学校は年齢別のクラス編成しかありません。幼稚園でも同じです。クラスの友達は大体同年齢同能力ということになります。ですから、クラスの中で友達とうまくやれてもそれは同じ能力の者とうまくやれるやり方を覚えただけです。しかも、同年齢の子供達の社会では個人と個人の均り合い、均衡が問題になるので競争場面が出現しやすく、いじめっ子といじめられっ子が出来易いのです。完全に弱いことがはっきりしている子供がいじめられるわけではないのです。

問題は、社会性というのは同能力・同年齢の中で、自分をどう位置づけるかというだけではないということなのです。社会というのは、自分より年齢の高い者・優れた者・また自分より年齢の低い者・弱い者から出来ています。こうした中で、自分がうまくやれることが大切なのです。昔は兄弟も多く、遊び仲間もクラスメイトだけでなく、自分より大きい子供も小さい子供もいましたが、今はそういう機会に恵まれることが少なくなりました。

新学期が始まって間もなくの4～5月頃になると、大学の運動部の事故がよく新聞に出たりします。新入生が合宿中に疲労や事故で死亡したり負傷したという話です。私には、体力のない新入生の健康管理の出来ない運動部のリーダーというのも理解できませんが、自分の体力以上の無理なことをさせられても、逃げ出したり、抗議もせず死ぬまで従順に上級生のいいなりになっている新入生も異常に思えます。大学生のことですし、悪意で上級生が下級生をいじめているとは思えません。

結局、リーダーの上級生は自分より体力のない者、弱い者、未熟な者をどう扱うかを知らないし、下級生も自分より目上の者、能力の高い者にどういう態度をとるかを知ら

なかったのだと考える他はありません。

わかばでは、社会性を左右と上下の関係と考えて、タテ割り・ヨコ割りという二つのクラスを作っています。一人の子供が二つのクラスに所属することになります。

ヨコ割りは、普通の年齢別のクラスですが、タテ割りの方は年少児・年長児が一緒になったクラスでホームルームとよびます。ホームルームには、自分より年齢の高い子供低い子供がいるわけです。卒園の年になると、お兄さん・お姉さんで、二年保育・三年保育の面倒をみることになります。強い子・年齢の上の子にはどうしたらよいか、また弱い子・年齢の小さい子にはどうしたらよいかを、自然に習得してしまいます。

朝の集まりや、食事、登降園時の身仕度等はホームルームで一緒にやります。しかし、課業や運動などで、能力別が必要な時はヨコ割りのクラスでやることになります。

このようにすると、子供達はいじめたり、勝手なことをしなくなります。難点は普通の幼稚園より、ホームルームの分だけ教室が余分に必要なことです。しかし、ホームルームでは、年長児は自分で何でもできますので、先生は主として小数の年少児の方に注意を向けていけばよいので、年少者に目がよく行き届くという利点があります。

## ● む す び

教育は早くから始めれば、その効果が大きいと考えている人達がおります。幼稚園でも漢字を教えたり、算数を教えたりして、いわゆる英才教育と称している園もあるようですが、物事を教わったり・練習したりして効果の上がる時期というのは決まっているのです。早くから始めても、その時期になってから初めてやっても結果は同じなのです。文字や絵を書くのが本当に上手になるのは、小学校の三・四年生位からですから、その頃に練習すると早く上手になります。これは、その事をするのに必要な脳・神経の成長が終わる少し前なのです。その脳・神経の成長の時期というのは、何を教わるか・練習するかによってそれぞれちがっています。この時期より遅れて教わったり練習したりすると、能率が悪くなります。また、早くから始めても労多くして、効果は少ないのです。つまり、早すぎても遅すぎてもよくないのです。平仮名のうちで自分の名前だけが極端に下手な生徒をみたことかありますが、あまり早くから名前の練習をさせたので、下手なりに固定してしまったのです。

子供は、また成長に個人差があるので、この適当な時期というのは、一人一人ちがうことになります。これではとても適当な時期に練習することが難しい話になりますが、実際は簡単なのです。子供がやりたがるときが、練習の最適の時期なのです。例えば、自転車に乗りたがったり、ブランコに乗りたがっている時、紙を破きたがった時がそのことについて練習する最適時期なのです。そして、やりたがるということは、上手に出来ることを意味していません。歩き始めた子供は、歩けるようになったので歩きたいという欲求をもつのではないのです。人間の場合は、欲求の方が先に起こるのです。まだ出来ないうちにそれをしたいという欲求が起こるので、この時が最も教えたり練習したりするのに効果が上がる時期なのです。

幼稚園は、こうした欲求を起こさせ、そして、充分教えたり練習したりすることが出来るような場所であると思います。欲求を起こすというのは、例えば自転車やブランコを見たことがなければ、乗りたいという欲求は起こらないでしょう。狼に育てられ狼と生活し、人間と生活したことがない子供は立ってあるくことをせず、四つん這いで言葉を話すことが出来ませんでした。ですからやはり欲求を起こさせる刺激や環境が必要なのです。これが幼稚園なのです。

以上、わかば幼稚園・保育園・ナースリ・スクールの保育の特色について概略を述べてきましたが、これらの他に体力・運動能力についても充分配慮していることは当然ですが、ここでは省略しました。身体の話は大体よく知られているからです。

子供の食事や身体の健康について、お母さん方は科学的な知識にもとづいて多くの注

意を払っています。

心の成長・発達についても、やはり同じように科学的な知識が必要です。私達は子供の将来の幸福のために、こうした方針で努力を続けてゆくつもりです。

以 上

平成元年 3 月 著

<著 者 略 歴>

- 昭和 23 年 早稲田大学文学部哲学科  
心理学専攻科卒
- 昭和 24 年 法務府技官（東京少年鑑別所）
- 昭和 26 年 早稲田大学助手
- 昭和 27 年 文部教官（福井大学助教授）
- 昭和 32 年 早稲田大学助教授  
わかばナースリ・スクール開設（現・八千代わかば幼稚園）
- 昭和 33 年 時間条件反射の研究により  
医学博士号授与
- 昭和 39 年 早稲田大学教授（教育学部）
- 昭和 36 年 八千代市公立保育所所長嘱託  
～44 年
- 昭和 47 年 社会福祉法人  
北蓮児童育成会理事長  
若葉高津保育園設立
- 昭和 53 年 学校法人服部学園理事長  
若葉ナースリ・スクール設立
- 平成 5 年 病没

<主 な 著 書>

- 教育の心理学（学文社）  
新・しつけの心理学（内田老鶴圃）  
心の衛生（学文社）